

全体会議 「ネットワーク日本研究」

問題提起

長友 和彦

この全体会議のテーマ「ネットワーク日本研究」には、グローバルな日本研究のネットワークを築きたいという期待が込められているが、そのためには先ず、諸外国において日本研究がどのように進められているか、その実態を把握する必要がある。その実態の把握を第1の目的として、ここでは、今回海外からお招きした方々に、次のような点についてシンポジウム形式でお話しいただく。その上で、できれば、実態の解明に伴い、グローバルな日本研究のネットワーク、連携のあり方も浮かび上がってくるよう、討議を進めたい。

それぞれの国における①大学での日本学関係の研究組織、教育組織の実態、教員の専門分野、②日本学関係の図書、資料等の整備状況、③学会組織の実態（どのようなくくり・単位のどのような名称の学会組織なのか、主にどのような活動をしているのか、etc.)

基調報告

イギリスにおける日本研究の現状

ジョン・ブリン

簡単に、イギリスにおける日本学の実態についてご説明します。

まず、現在における日本学について説明してから、私が所属している SOAS における日本学・日本語学について説明しまして、3番目としては、横断的で学際的な全英の BAJIS (British association Japanese studies) についても、簡単に説明します。

まず、英国全体における日本学・日本語学の実態について申し上げますと、現在、50以上の大学で、日本学・日本語学(日本語)を学習できるようになっています。そのなかで、伝統的な日本研究と言えば、オックスフォード・ケンブリッジ・ロンドン大学、それにプラス、シェフィールド大学を付け加えてみますと、戦後、4つの大きな日本研究(日本語研究)がさかんに行われている大学・大学院のある国です。その他にも、戦後、Leeds 大学・エジンバラ大学などで、日本研究(日本語研究)をやっていますが、どうしても社会科学的な重みがあるので、そういった意味では、ロンドン大学・オックスフォード大学・ケンブリッジ大学が、特別な存在と考えていただけたらいいかなと思います。というのは、平安時代・またはそれ以前の文学・歴史、それから戦後の政治史・経済史まで、網羅的に

やっているのに対し、シェフィールドなどの大学は、ほぼ社会科学的なところに重点を置いているのが現状です。

次に、2番目にご説明します SOAS についてですが、ロンドン大学は ご存知かと思いますが、連合制的な大学で、40以上の college で構成されている大学で、私達の SOAS (School of Oriental and African Studies) もその college の1つですが、歴史としては、1917年に創立された学校ですが、戦争になってはじめて軌道に乗りました。日本研究・中国研究・インド研究などが軌道に乗ったのは、戦争がきっかけとなっています。SOAS というところは、複雑極まる構成になっています。SOAS のなかには、12、3くらいの学部がありまして、音楽学部・史学部・政治学部・文化人類学部などがあって、その他にも東アジア学部があります。で、東アジア学部のなかに、中国学科・日本学科・韓国学科・チベット学科があって、私が所属しているのは当然日本学科なのですが、近世文学 近松門左衛門の研究をやっている人と、それから大正文学をやっている人と、それからチョムスキー流の言語学をやっている（つまり）チョムスキー流の理論を日本語に応用した研究をやっている人もいますし、それから、今流行っている応用言語学としての日本語をやっている先生もいます。ほかには、media studies といまして、日本の映画・テレビなどを研究している人もいます。それから、日本の宗教学が専門の先生が1人います。これらの先生は、今、日本学科に所属しているのですが、日本学に関わっている SOAS の教師はそれだけではありません。政治学部にも、文化人類学部にも、歴史学部、音楽学部、経済学部などにも、日本のことを専門にしている先生達があります。ですから、日本のことを専門にしている教師陣は通算22、3名います。それから、複雑な仕組みが更に複雑になり、研究センターというものがある、JRC (Japan research center) がその1つで、それぞれの学部の日本のことが専門の先生達が集まってゼミなどをやる研究センターで、CSJR (center for the study of Japanese religion) という研究センターも最近私達が作ったのですが、宗教学部・文化人類学部・あるいは政治学部で宗教に多少関心を持っている先生が、CSJR で発表したりしています。

SOAS の構成はだいたいそんなところで、当然、日本学と言えば我々が、研究している分野に限らないもので、学部の学生の教育でたくさん時間をとられてしまうので、若干、日本語教育そのものについて説明します。ええ、まず SOAS に入って日本語を学習したいという希望者は、今のところだいたい一学年2、30人前後の学生がいます。それからその30人というのは、入学希望者のまあだいたい毎年300人の中の10人に一人という、まあその競争率なので、これだけ競争率が高いから、学生の質が高いと思っていただいたら間違いかも知りませんが、中には優れたいい学生もいます。そうではない学生もどうも毎年多いですけども。

それから、各学年に関して申し上げますと、一年目は基礎的な日本語学習を終えてから、日本に一年間留学、交換留学で、上智大学、慶応大学、早稲田大学、東京大学などに学生を送っています。それから、SOAS に戻って、3年生、4年生は、地元で学位を取るまでの最後の二年間を過ごしてまいります。それから、大学ということで、うちの日本語学科で4年生の教育で、特徴というか面白いことは、1年生と3年生などで、例えば日本史をやるとしますよね、日本史は、講義は英語でやります。ただ4年生になれば日本語を通して日本史をやる、日本語を通して日本文学をやることがある、という要するに歴史、音楽、経済とそれから日本語が平行して学習していくのが、4年生になればそれが合流して、かなりレベルの高い語学の学生を養うことに成功しているのではないかと思います。

それからですね、イギリス全体の日本学の実態を述べますと、ここは SOAS の他にも50以上の大学、ケンブリッジ、シェフィールド、その他たくさんある大学の教師たちが、毎年一回全員が会員になっている訳じゃありませんけど、British Association of Japanese Studies (BAJS) に入っている人たちも毎年の学会に出てもらって発表しています。それからこの BAJS という横断的な、学際的な組織なんですけど、BAJS というのは大体三つの機能を果たしている機関として考えていただきたいと思います。

その一つは、今言いましたところの British Association Japanese Studies Conference、それは毎年4月にイギリスのどこかの大学で開催するもので、今年の四月には小風先生に来ていただいて、発表していただいたんですけど、その学会はさまざまなパネルがありまして、今年は歴史のパネルですとか、応用言語学のパネルもあれば文学のパネルもあります。

それからもう一つの BAJS の機能は事業としまして、ジャパン・フォーラム (Japan Forum) という学術雑誌の編集事業があります。Japan Forum という学術雑誌は、イギリスの大学の日本学の先生たちが編集委員会を組んで運営しているわけなんで、どうもこの Japan Forum に投稿される論文は、その殆どが社会科学的なものが多くて、今年の場合歴史の論文は案外少ない、文学も少ない。で、20世紀、21世紀の日本の研究をとりあげた論文が過半数を占めているのが Japan Forum の現状で、それはやはりイギリスにおける日本学の現状を反映させたものだと思います。

それからもう一つの規模の小さい事業と申しますか、機能なんですけど、こういうのがあります。Ian Morris 賞 と言いまして、Ian Morris のことご存じの方がいるかも知れませんがイギリスの、数年前に亡くなったんですけど、平安時代の文化から21世紀の右翼団体の研究まで、かなり幅の広いしかも教養のある方で、その方の研究を記念するために Ian Morris 賞というのをやっています。それは、マスター論文で、全国の日本関係のマスター論文の優秀なものを我々が抜き出して賞を授与する仕事があります。

ですから、その三つの機能を果たすわけなんで、第一その学会、それから Japan Forum という学術雑誌、それから第三番目は Ian Morris 賞です。まあ、以上はイギリスにおける日本学、日本語学界の一環を申し上げました。以上です。

チェコにおける日本学総覧

ダビッド・ラブス

現在のチェコで行われる日本研究は、おおよそ四分野に分けることができる。大学レベル研究、大学以外の高等学校と国立外国語学校での日本語講座、博物館や美術館における研究と展覧会活動と科学アカデミーの付属機関としての東洋研究所における日本研究なのです。

1 大学レベルの研究と言っても、現時点では、日本学科が独立している Olomouc (オロモウツ) 市の Palacký (パラツキー) 大学とプラハのカレル大学と、ブルノ市にある、言語学学科に付属している Masaryk (マサリク) 大学と、Plzen 市 (ピルゼン) の西ボヘミア大学、経済学部の日本経済センター